

硯友會和歌 : 和歌 : 文苑

著者	扶草, 奇熊, 一心, 桃江, ?, 山人, 蘆月, ?泉, 芝峯
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 6
ページ	5 9 - 6 1
発行年	1898-06-25
その他の言語のタイトル	硯友会和歌 : 和歌 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5120

も軽からざるに似たり、また逢ふことのありやなまやと、思へば胸塞りて、別の涙禁むること能はざりしかども、學の道に身を委ぬれば、ほいなくも辞して、西に罷りけり、かくて、三とせ、四とせの間、さまたる音つれもなかりければ、今尙壯健にましますらむと、心のどかに、再會の期をまちけるが、この今日、圖らずも、大人の訃音に接したり、百感胸に横りて、濳然として、先づ下るものは、涙なり、生者必滅、會者常離は、人生數の免かれざる所とはいへ、天公何ぞ無情なる月をかへ年を重ねるも、依然として、變らざるは、我心と銃となり、殊にこの銃こそ、大人の形見にして、之を見つゝ、大人をこひ慕ふなり、駿馬も、王良に逢はざれば、驚馬にし、かず、良弓も、射手を得ざれば、用を爲さず、銃若し、靈、わらば、好主人を失ひたるを、や、歎くらむ、今やこの銃ありて、大人はなし、嗚呼、かなしきよな。

和歌

硯友會和歌

夢中郭公(兼題)

まちかねてまどろむほどもなつの夜の夢路をわたる山郭公
 さよふけてはのかになのる郭公夢かあらぬか一聲なきぬ
 待わひてまどろむほどの一聲は夢のうちとも思はざりけり
 夏の夜のたどる夢路の一聲をうつよとやさく山はとくさす

文苑

五十九

扶草 奇熊 一 桃 江 心

風そよく小川の岸の青柳にゆらく螢のかけの涼しさ
青柳の糸より細くとふ螢見えつかくれつ影のほのめく
青柳の糸の敷さへ見るはかりみきは亂れてとふ螢かな

當座探題

岡新録

きのふけふ夏きにければから衣たつたの岡はみどりとなる

軒菖蒲

見るたひに思ひを出つる故里の軒の菖蒲にそよ夕風

夏草滋

里人はかりにかれどもたくま野の草は日ごとにしけりゆくかな

夏眺望

若緑しける野末に白妙の衣にかふる夏は來にけり

雑歌

雲雀

雲井より落くる野への夕ひはり猶大空に聲のゝこれる

藤

千代かけてよはひをちきる松か枝に若紫の藤波の花

斜 草

扶 草

廬 月

芝 峯

清 泉

蘆 月

奇 熊

扶 草